

# 中国の対中東戦略と中米関係

三船恵美

〈駒澤大学〉

## 要 旨

近年、中国の外交プレゼンスはグローバルに拡大している。現在の中米関係を理解するためには、中米二国間のダイナミズムだけでなく、中米関係に関わる多国間関係の中での戦略的位置づけも察する必要がある。そこで、本稿では、《中国の対中東関係の強化》が中米関係のなかで如何に位置づけられるのかを論じる。ただし、中国の対中東関係の強化が中米関係の悪化を意味するものとして論じはしない。なぜならば、中米関係の協調構築も中米両国の安全保障に重要だからである。中国の安全保障で最も重要なものは経済安全保障である。中米関係が新たな段階に移った現在、中国プレゼンスが大きくなっている中東外交で、米中の協調枠組みを如何に形成していくかが、今後の米中関係に新たな方向性を創り出し、中国台頭論に新たな流れを作り出し、それが中国を「アジア太平洋地域の大国」から「世界の外交大国」へ押し上げることになるであろう。

**キーワード** 中米関係、中国の対中東戦略、中国台頭論

## はじめに

近年、中国の外交プレゼンスはグローバルに拡大している。現在の中米関係を理解するためには<sup>1)</sup>、中米間のダイナミズムだけでなく、中米関係に関わる多国間関係の中での戦略的位置づけを考察する必要がある<sup>2)</sup>。そこで、本報告では、中国の各地域戦略が中米関係に及ぼす影響を分析する一事例研究として、《中国の対中東関係の強化》が中米関係のなかで如何に位置づけられるのかを論じる<sup>3)</sup>。

次の構成に従って論じる。まず、中国の対中東関係の強化を「中国台頭論」の視角から如何にとらえられるのかを論じる。次に、中国の主要な対中東戦略を、エネルギー戦略、中国の地政戦略、武器移転戦略、大国外交戦略、対アメリカ戦略、人権戦略、台湾戦略の7点から論じる。最後に、

これらが中米関係に影響を及ぼしている点を論じる。

## 一 「中国の対中東関係の強化」と「米国の中国台頭論」

張志新によれば、現在の「中国脅威論」は第5波にあたる<sup>4)</sup>。袁鵬は、現在の「中国脅威論」を「軍事脅威論」・「経済脅威論」・「能源脅威論」・「外交脅威論」・「模式脅威論」<sup>5)</sup>に分類した<sup>6)</sup>。これらへ、中東における中国プレゼンス拡大を筆者が当てはめてみると、「経済脅威論」以外すべてに当てはまる。近年の中米間に存在する主な相違点は、台湾問題<sup>7)</sup>、武器移転問題<sup>8)</sup>、人権問題<sup>9)</sup>であった。しかし、現在では、従来の3点に中国のエネルギー問題ならびにエネルギー戦略が加えられた。中国の対中東関係の強化は、これら4点すべてに関

わっている。これらの視角から、中国の対中東関係の強化を米中関係の視角から考察することには学問的意義がある。

米国連邦議会の超党派議員による米中経済安全保障再考委員会が、2005年11月、年次報告書を公表し、中東などにおける中国の活動へ注意を払った情報収集の活動拡大を勧告した<sup>10)</sup>。2005年7月には、米国防総省が中国の軍事力に関する連邦議会への年次報告書を公表し、エネルギー資源の確保と安定供給を目指す中国の戦略を初めて「脅威の種」として捉え、急激な経済成長に伴い中国がエネルギーの海外依存を強めており、それが中国の戦略に影響を与えていると指摘した<sup>11)</sup>。中国脅威論や中国台頭論の提起は、米国の議会や政府だけではない。言論界でも、傳夢孜が注目した Mearsheimer や Kaplan<sup>12)</sup> などの過激な中国台頭論や米中衝突論もある<sup>13)</sup>。そのような事態を危惧して、元NY総領事の張宏喜のように「台頭論は中国の国情には合わない<sup>14)</sup>」、と指摘する声もある。しかし、中国の経済・外交・軍事の影響力がグローバルに展開されていることは紛れもない事実である。

## 二 中国の対中東戦略

主要な中国の対中東戦略として以下7点が挙げられる。

まず、第1に、エネルギー戦略である。世界第6位の産油国でありながら、2003年に米国に次ぐ世界第2位のエネルギー消費国となった中国は、石油輸入国として世界第5位に位置づけられる(2003年値)<sup>15)</sup>。中国は、資源の確保を「総合国力を保障するもの<sup>16)</sup>」として、国家安全保障の枠組みでとらえている。中国の国家石油安全保障戦略の主な骨子の1つは、政治的・外交的・軍事的・法的確手段の行使による国内外の石油資源への国家の有効なコントロールの保持である<sup>17)</sup>。

第2に、地政的な安全保障戦略である。これに

は2つの戦略がある。1つには、中東地域で中国の影響力を拡大することは、大国間のパワーゲームで中国を戦略的に優位にする。もう1つは、中東という地域が中国の安全保障に重大な影響を及ぼす「周辺」の延長上にある点である。李偉建は次のように指摘する。「中国の西部は中東の近隣にあり、中東の民族主義とイスラム過激派は、中国の安全保障に直接的な影響を及ぼすことになる。中東地域の新しい変化の中で、アメリカのイラク戦争一周年後、アメリカは、拡大中東地域の民主改革、いわゆる『拡大中東計画』を提起した。拡大中東計画が実施されれば、中東地域の矛盾はさらに錯綜し複雑になり、未来の中東地域の形勢は、中国の周辺戦略環境や相対的な安全形勢、中国のアラブ国家やイスラム世界との関係に影響が及び、中国の中東地域における現実と長期的な利益に特殊で重要な意義を持つ<sup>18)</sup>」。

第3に、中東の武器移転である<sup>19)</sup>。単に収益だけでなく、石油調達の対価としての意義がある。武器輸出は政治的影響力の行使を容易にし、地域的影響力を拡大することになる。エネルギーの重要な供給地域・中東に対して、中国が主要な武器供給国でいることは、一方的な依存関係を相互的な依存関係にする。龔邃は『当代世界』で「国家利益」の原則として「双贏・共贏」原則の関係を挙げ、「片方だけの利益獲得であってはならない」ことを説いている<sup>20)</sup>。

第4に、大国外交戦略が挙げられる。エネルギー資源と中国の外交能力の相互依存による「双贏・共贏」関係の構築である。国連安保理での拒否権行使など、中国が国際政治の舞台で行使可能な「外交能力」が、中国にとって戦略的優位な国際関係を作り出している。

第5点目に、アメリカ一極体制への挑戦である。中国外交部は「世界の多極化や国際関係の民主化と発展モデルの多様化を推進し続け、覇権主義と強権政治に反対する」と主張している<sup>21)</sup>。例えば、イランのケースを挙げるならば、「対米戦略とし

ての多辺外交戦略の象徴的アクター」という要素を視ることが出来る。中国がアメリカと直接に対抗するわけでもなくとも、アメリカと対立するイランとの関係を中国が強化することは、アメリカへの戦略的メッセージになる。

第6に、人権外交戦略である。現在の国連は、アメリカを基軸とするグループ、EU構成国によるグループ、そして中国を基軸とするグループに大別できる。中国グループの有力な勢力が中東諸国である。中東諸国は、中国の人権問題をめぐり、中国を支持してきた。

第7に、台湾戦略である。「1つの中国」原則への支持はもちろんのこと、アメリカの台湾政策に対する批判の側面も併せて考えられる。2002年3月、アメリカは台湾の楊湯明を非公式ながらも《台湾国防部長》の身分で米台防衛サミットに参加させ、米台軍事交流を格上げしたことに中国は強く反発していた。さらに4月、アメリカ上院での演説で、ブッシュが台湾を《Republic of Taiwan (台湾共和国)》と呼び、中国をさらに怒らせた。ホワイトハウスが「大統領発言は間違いであり、アメリカの対台湾政策に変更はない」と弁明した翌日に、中国政府は「イランとの関係強化のために江沢民主席がイランを訪問する」と発表した。ブッシュ政権が《悪の枢軸》と名指しするイランとの関係強化を見せつけることによって、ブッシュ政権の対中台戦略の改善を引き出させようとする中国のねらいがあったと考えられる。また、アメリカから制裁を受けながらも中国がイランへ武器移転を続ける背景には、巨額な貿易利益やエネルギー安全保障戦略のみならず、アメリカから台湾への武器移転に抗議する意味も含んでいる、と筆者は考える。

### 三 中国の大国外交と中米関係

中国の対中東関係の強化は、アメリカと中国の間に存在する台湾問題、武器移転問題、人権問題、

エネルギー問題の全てに関わる。さらに、アメリカ一極体制への挑戦すなわち「多極化」という点も含めると、「中国の対中東関係の強化」は、中国とアメリカの間の5つの領域で対立構造を作り出している。

しかし、中国の対中東関係の強化は必ずしも比例的な中米関係の悪化を意味するものではない。なぜならば、中米関係の協調構築も中米両国の安全保障に重要だからである。中国軍事科学研究第15計画課題成果の『江沢民軍事創新思想研究』が指摘するように、中国の安全保障で最も重要なものは経済安全保障である<sup>2)</sup>。米中間に相互信頼が構築されているわけではないが、中国の国家繁栄のためには、アメリカをはじめとする世界との平和・協調が必至である。「戦略相互信頼が中米関係の未来の鍵」になる。そのためにも、重要な対米メッセージとなるよう、安全保障分野における制度化、例えばMTCR(ミサイル技術管理体制)などに中国が積極的に参加していくことが、今後必要ではないだろうか。

中米関係が新たな段階に移った現在、中国プレゼンスが大きくなっている中東外交で、米中の協調枠組みを如何に形成していくかが、今後の中米関係に新たな方向性を創り出し、中国台頭論に新たな流れを作り出すことになるだろう。また、それが、中国を「アジア太平洋地域の大国」から「世界の外交大国」へ押し上げることになる。

#### 注

- 1) 中米の安全保障戦略についての報告者による研究に以下などがある。三船恵美「中国的多辺外交戦略と日中関係の戦略好機」中華日本学会・中国社会科学院日本研究所『日本学刊』2004年第2期、131-138頁、三船恵美「米中関係」五味俊樹・滝田賢治編『9・11以後のアメリカと世界』南窓社、2004年、158-170頁、三船恵美「米国の対北東アジア安全保障政策と中米関係」『中国研究月報』2002年11月号、1-15頁。
- 2) 三船恵美「中国の対中央アジア戦略と中米関係」『世界週報』2005年12月13日号、52-53頁。

- 3) 近年の中国の対イラン関係の深化についての研究に以下などがある。三船恵美「米中関係のなかのイランとイスラエル」『世界週報』2005年10月4号、50-51頁、三船恵美「中東関係を強化する中国」『季刊アラブ』113号(2005年6月)、18-19頁、三船恵美「中国の対イラン関係強化をめぐる米中関係」中国研究所『中国研究月報』2004年12月号、1-15頁、三船恵美「中東との連携を強化する中国——米中関係に与える影響を中心に」『問題と研究』2004年9月号、1-12頁、三船恵美「対中東関係」霞山会監修『中国総覧2004年版』2004年、221-229頁、三船恵美「対中東関係」霞山会監修『中国総覧2006年版』2006年掲載予定。
- 4) 張志新「“中国威脅論” 歴史 “弥新”」『世界知識』2005年第17期、44-45頁。
- 5) 「模式脅威論」=「北京共識」については、『2005中国国際地位報告』人民出版社、2005年、20-51頁、が詳しい。
- 6) 袁鵬「“中国威脅” 与中美合作」『瞭望』2005年第34期、47-49頁。
- 7) この点については、三船恵美「米台中関係の歴史と現状」天児慧・浅野亮編『世界政治叢書：中国・台湾』ミネルヴァ書房(2006年刊行予定) 収載、を参照されたい。
- 8) この点については、三船恵美「EU が対中国武器禁輸解除を再検討」『世界週報』2005年5月3日号、50-51頁、三船恵美「EU が対中国武器禁輸解除へ」『世界週報』2005年4月5日号、48-49頁、を参照されたい。
- 9) この点については、三船恵美「米中関係における人権外交」中国現代史研究会『現代中国研究』第12号、2003年3月、64-84頁、を参照されたい。
- 10) The U.S.-China Economic and Security Review Commission, Hearing on China's Growing Global Influence: Objectives and Strategies, July 21, 2005.
- 11) Department of Defense, *The Military Power of the People's Republic of China: A Report to Congress Pursuant to the National Defense Authorization Act Fiscal Year 2000*, Department of Defense, July 2005.
- 12) Zbigniew Brezinski & John J. Mearsheimer, “Clash of the Titans”, *Foreign Policy*, No. 146 (Jan/Feb), pp. 47-49. Robert D. Kaplan, “How We would Fight China”, *The Atlantic Monthly*, Vol. 295 Iss. 5 (June 2005), pp. 49-55.
- 13) 傅夢孜「中国威脅、還是威脅中国」『世界知識』2005年第17期、38-40頁。
- 14) 張宏喜「“崛起論” 不符合中国国情」『世界知識』2005年第16期、56頁。
- 15) US Energy Information Administration.
- 16) 《資源力=総合国力の保障》の視点から国家安全保障を論じたものに、李方主園編『中国総合国力論』安徽科学技術出版社、2002年、などがある。中国のエネルギー安全保障論については、例えば、呉磊『中国石油安全』中国社会科学院出版社、2003年、張文木『世界地緣政治中心的中国国家安全保利益分析』山東出版社、2004年、倪建民『国家能源安全報告』人民出版社、2005年、などがある。また、中国の資源状況については、中国現代国際関係研究院世界經濟研究所『國際戰略資源調查』時事出版社、2005年、が詳しい。
- 17) 孟慶俊・孫保真・于喜廷主編『二十一世紀初中国石油工業發展对策研究』中国石化出版社、2003年、332-337頁。
- 18) 李偉建「中東在中国戰略中的重要性及双边關係」『中国外交』2005年第2期、43-44頁。
- 19) 中国から中東への武器移転については、例えば、アメリカ議会調査局による報告書などを参照されたい(Richard Grimmett, *Conventional Arms Transfers to Developing Nations, 1995-2002*, Washington D.C.: Library of Congress, Congressional Research Service, 2003, p. 59)。
- 20) 俞邃「当今世界局勢中的十大關係」『当代世界』2005年第3期、5頁。
- 21) 中国外交部《中国外交政策》〈<http://www.fmprc.gov.cn/chn/wjb/zzjg/zcyjs/jbzc/t24782.html>〉
- 22) 肖智林・胡建剛主編『江沢民軍事創新思想研究』軍事科学院出版社、2004年、p. 110。